

# 世界史研究推進委員会

共同研究「高大連携」および「世界史への興味・関心を育む教材・指導法の研究」経過報告

湘南高校 中山拓憲

## 今年度の活動

2021年度も新型コロナへの対応が求められた1年になりましたが、試行錯誤の結果、多くの企画を中止にすることなく1年を終えることができました。昨年度の研究報告に、「貴堂先生には、状況が悪化しなければ、この『研究報告』が配布される日（春季大会当日）でご講演いただいているはず。」と書きましたが、無事実現できました。3月の歴史分科会大会にもカルタゴ史の佐藤育子先生にも2年越しで来ていただくことができました。高大連携講座も、「ハイブリッド」で行いました。これらについて詳しくは、本冊子に載っていますので、ご覧いただければ幸いです。

2か月に1度の例会では、桃木至朗編著『ものがつなぐ世界史』ミネルヴァ書房の読書会を中心に、教材や授業法の開発に取り組みました。また『歴史総合』に向けて、日本史研究推進委員会と合同で日世合同研究推進委員会を3回開催し、その成果を3月の歴史分科会大会で発表しました。（別頁）

## 歴史総合が始まる！

来年度から新科目『歴史総合』がいよいよ始まります。『歴史総合』は、考えようによっては、歴史教員の夢がかなった教科なのかも知れません。例えば「世界史と日本史を分けるのはおかしい。」と言っていた先生方は少なくありませんでした。本分科会でも、日世合同は何年も前から行っており、世界史の講座である高大連携講座で日本史の先生が授業をしたのも1度や2度ではありません。そういった意味で、歴史総合は待ち望んだ科目です。「歴史は暗記科目ではない」と私たち歴史教員は主張してきました。基礎的な知識を覚えることは必要だけど、3000以上の用語を覚える必要があるのか。それよりも生徒自らが思考し、議論することが大切なのではないか。また通史にこだわり過ぎると、網羅的に広く浅く教えることになり、知識重視にならざるを得ません。『歴史総合』では、「近代化」「大衆化」「グローバル化」などの概念が重視され、生徒が問いを表現したり、課題解決をしたり思考力が求められる内容が多分に盛り込まれています。一方で、指導要領、教科書にある程度、通史という面も残っています。「歴史は現代と結び付けるものだ。生徒が「わたくしごと」として考えることが大切だ」『歴史総合』では現代の諸課題を歴史と結び付けて考えること、「わたしたち」との関係が重視されています。「入試で暗記が求められる以上、授業も知識詰め込み型にならざるをえない」と言う我々の悩みも、共通テスト、私大の入試改革などで改善に向かっていきます。

教科書ごとに内容が大きく違うことを問題だと捉える向きもあります。「結局、何をすればよいのだ」ということでしょうか。指導要領に忠実、思考力重視、概念重視、知識重視などなど、様々です。ただし、それら全てが検定を通過していると考えれば、文科省は多様な歴史総合を認めていると考えられます。2単位で内容の精選が必要です。実際の授業内容は現場に任されていると言えるでしょう。

## 歴史教育の危機と、これから

現在は、歴史教員(特に世界史教員)にとって良い状況ではありません。新カリでは歴史科目は大きな単位減です。世界史は必修でなくなりました。（「世界史未履修問題」も一因でしょう。）現在の新型コロナウイルス、ウクライナ、ミャンマー、アフガニスタン、シリアなど、現在、世界情勢を考えれば、世界史を学ぶ意義がますます大きくなっています。ぜひ魅力的な歴史教育を現場から発信して、多くの生徒を世界史に惹きつけていきたい。世界史研究推進委員会は、そのために活動をして参ります。もし参加を希望して下さる先生がいらっしゃいましたら、気軽に中山までご連絡ください。